

## 四川ナシ族における祭天と祭山（1）

－ 俄亜ナシを事例として－

松岡正子

### はじめに

漢チベット語族チベット・ビルマ語群のチャン語系やイ語系に属する民族集団は、山神を崇拝し、祭山を重要な年中行事の一つとする。彼らは四川西南部から雲南北部に広がる「藏彝走廊」に居住し、族源を古代羌と伝える人々で（以下チャン系集団と記す）、チャン族や川西南チベット族、ナシ族、プミ族、イ族、リス族、ハニ族などが含まれる。筆者は、これまでチャン族や西南チベット族、

プミ族の祭山について分析し、チャン系集団にみられる共通の要素を指摘した（図1）<sup>(1)</sup>。本稿では、さらにこの集団内に含まれながらその地理的孤立性のために実地調査が難しく、これまで研究があまり進んでいない四川省のナシ族をとりあげる。

ナシ族は、総人口約30万1000人（2003）で、金沙江を

（図1）「西版」諸集団の言語分布

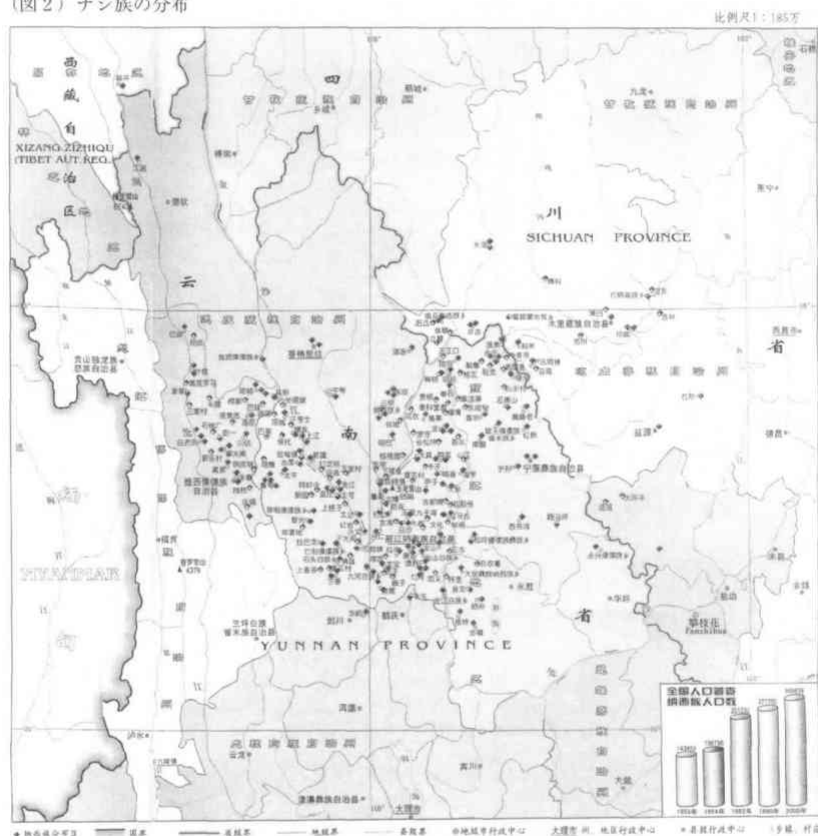


〔出所〕四川省人口委委辦公室編『四川藏族人口』（中国統計出版社、1994）46頁、孫宏開「大江流域的民族語言及其系屬分類」、『民族學報』1983.3、1983。池田巧「西南中国（川西民族走廊）地域の言語分布」嶋山理編『消滅の危機に瀕した言語の研究の現状と課題』（国立民族学博物館調査報告39、2003）110頁より作成。

(1) [松岡、2000：239～246、2003：459～469]。何耀華（1991）「川西南藏族的信仰民俗」『中国民俗研究通信』8号や[石碩、2005：13～31]にも詳しい。チャン系集団の居住する「藏彝走廊」は、青藏高原東部の6つの大河が南北に貫流する平均海拔高度が2000～3000メートルの峡谷地帯で、古くより6大河に沿って幾多の民族が移動し、現在も複雑な言語と民族集団が存在する地域である。

はさんだ西側の滇西北地区に約85%、東側に15%弱が居住する。このうち麗江納西族自治県には総人口の約67%にあたる184,894人が集中し、中甸県には21,630人、寧蒗県18,089人、維西県16,620人、永勝県84,832人、大理9,595人、昆明5,368人で、四川と雲南の省境周辺には8,542人、四川側は木里県（俄亜と水洛）3,618人、塩源県737人、塩辺県2,005人が分布する（図2）。

（図2）ナシ族の分布



〔出所〕 郝時遠（2002）『中国少数民族分布図集』中国地図出版社P175より

言語は、チベット・ビルマ語群イ語系に属し、西部と東部の方言に大別される。ナシ、ナホン、ラル、ラロ、ユンク（以上西部方言）、ナリとマリマサ（以上東部方言）の7つの下位集団がある。このうちナシは約23万

人で、総人口の約 77% を占める最多集団である。支配層の木氏は、明代以来漢文化を積極的に取り入れ、漢族など他民族を融合して雲南北部から四川の木里に至る広い地域を支配した。トンパ教とトンパ文字が伝えられている。ナホンは、早期に維西から寧蒗県北蕨壩に移住した集団である。ラルは約 5,000 人で、元来は他民族であったのが長期にわたるナシとの雑居や通婚のためにナシになった。ユンクは最も早く四川の塩源や木里から中甸にきた集団とされる。ナリは約 4 万人で、雲南省北部の寧蒗県を中心に 2 万、四川省の塩源县に 1 万、木里県に 1 万、塩辺県と渡口市にそれぞれ千人いる。ダバ教とダバ文字が伝えられている。ラルは、塩源县の左所、前所、沿海や木里県の屋脚、頂脚などに居住する集団で、言語習俗がナリに近い。近年、蒙古族に改称した<sup>(2)</sup>。マリマサは約 25,000 人で塩源から維西に來たという口頭伝承をもつ〔田、2005：565～566〕。

四川省のナシ族にはナシとナリの下位集団がある。ナシは明代中期に麗江から移ってきた集団であり、ナリは、ナシの移住以前にすでに四川と雲南の省境のロコ湖周辺に定住していた集団である。このうちナリは、モソと呼ばれ、母系制を保つ「女人国」として紹介され、多くの研究報告がなされている<sup>(3)</sup>。これに対して四川省のナシは、移住先が地理的に極めて閉鎖的な山間にあり、また後発集団として自集団の自立を図るために地元の土司に対抗し、周辺他民族との接触を避けて内部での特殊な婚姻形態を行ってきた。その結果、彼らの社会には移住当時の明代以来の習俗が色濃く伝えられているという〔宋、2003：2〕。

本稿では、四川ナシに移住以来伝えられている祭天や祭山について、1980 年代の調査をまとめた宋兆麟『俄亞大村——一块巨大的社会活化石』（以下、宋報告と記す）や和志武ら主編『中国原始宗教資料叢編』（以下、和編報告と記す）などの既存の報告を整理分析し、麗江ナシの祭天や四川ナリおよびチャン系集団の祭山と比較してその特徴を考察する。

(2) ナリとモンゴル族については〔李、2006：105～115〕に詳しい。

(3) 1960 年から 2005 年までの主な研究成果は、拉他味・達石主編（2006）『摩梭社会文化研究論文集』（上下冊 雲南大学出版社）に収められている。

## 第1章 四川ナシの年中行事と神々

### 1. 俄亜ナシと達住ナシの概況

四川ナシは、木里県俄亜郷と塩源县達住郷に集中して居住する。

俄亜郷は、四川省木里県西南の雲南との省境の山間部に位置する。平均海拔高度は2400メートル、北は4000メートル級の寧朗山脈、西は峽峭山脈に囲まれ、東は沖天河、南は龍打河に面する。高山部は寒冷でヤクを飼う牧畜を主とするが、山腹は亜熱帯気候で、年平均気温が15度、無霜期間260日、平均降水量1000ミリで、主にトウモロコシや小麦を栽培する。清末に開かれた龍達金鉱は豊富な埋蔵量で知られている。冬は雪に閉ざされる険要で閉鎖的環境のために他所との往来は多くない。木里県城までは歩いて約10日、寧蒭永寧や麗江宝山までは3～4日であることから雲南側との往来がやや多い〔木里藏族自治州志編纂委員会、1995：131～132〕。

俄亜ナシは、明代の移民の末裔である。伝説によれば、明代（1368～1661）中期に麗江ナシ族木土司の管家ワチガジャが狩場だった当地を気に入って一族やトンバ、牧人、馬飼などを連れて移住してきたという。また金鉱開発のために木土司が兵士を駐軍させたともいう。ワチガジャー族は木土官に封じられ、約400年を経る。麗江木土司は、宣徳8年（1447年）に永寧土司とともに左所土司を打ち破って以来、木里を占領し、現在の西藏自治区に接する雲南の巨甸や維西、中甸、徳欽、四川の巴塘、理塘に及ぶ地域を占拠した。そして嘉靖（1522～1566）・萬曆（1573～1619）年間には明王朝下で吐蕃と戦った。沖天河及び支流流域には、木土司が出兵時に築いた高さ数十メートルの碉堡の一部が残存している。しかし1674年にチベット軍が中甸に侵入して木里土司に出兵を命じ、木土司軍を破ったため、以来、当地は人民共和国内成立前まで木里大寺の管轄となった。人民共和国内下では1953年に俄亜郷が設けられ、83年に俄亜ナシ族郷となった。1990年の統計では6の行政村と28の村民組、50の自然村からなり、総戸数644戸、総人口4566人で、ナシ族とチベット族、漢族がくらす。農民一人あたりの平均食糧生産量は483斤、家畜数は9.4頭、年純収入は266元である。このうち俄亜村は、俄亜と克之、拖之の3自然村からなり、総戸数120戸でほとんどがナシである〔木里藏族自治州志編纂委員会、

1995:131～132, 四川省編輯組, 1987:70～76, 宋, 2003:3～10]。

俄亜ナシには、「アダ（安達）」婚という特殊な婚姻がある。アダは、正式な婚姻以外の恋人関係で、女性が男性のもとに通い、子供は女性の家庭に所属する。いかなる手続きも儀式も不要で、恋愛感情があれば成立し、なくなれば別れる。これに対して正式な結婚は父母が決め、イトコ婚が優先される。兄弟が1人の妻を共有したり、姉妹が1人の夫を共有したりすることが多い。正式な結婚後も夫婦がそれぞれアダをもつことが多く、夫婦が性的関係をもつのは一定の年齢に達してアダの関係がなくなってからだという〔宋, 2003:11～84〕。

達住村は、四川省涼山彝族自治州塩源县左所区沿海郷に属する。四川と雲南の省境にあるロコ湖の四川側の湖岸に位置し、西北にはグム山が、湖中にはワグ山が聳える。平均海拔高度は2400メートルで、年平均気温は10～15度、夏冬ともに穏やかで、風光明媚である。伝説によれば、本土司が明代に木里を占拠した時に派出した兵士が、本土司の勢力が衰えた後に麗江に戻ることができずに定住した。当時、一帯は永寧土司の管轄下にあつてヒエの収穫にはいつも徴集されたが、ヒエを靴に隠して持ち帰り、栽培を始めた。少数ではあつたが、組織化された軍兵であつたために永寧土司も左所土司も治めることができなかった。彼らは、木里大寺の管轄下に入って、人民共和國成立まで永寧土司に対峙した。1957年の統計では、総戸数81戸、総人口608人であつた。婚姻は、父母が決める一夫一妻制が原則である。住民は周辺に居住する東部方言のナリ語やブミ語も話せ、多くが漢語も使える〔四川省編纂組, 1987:1～6〕。

両者はともに明代に移住したと伝えるが、その時期は婚姻形態をみるかぎり俄亜ナシが達住ナシより早期であつたとみられる。明代は土木司が積極的に漢文化を受容した時代で、達住ナシの婚姻には漢文化の影響が強くみられるからである。また周辺民族との往来の多い達住に比べ、俄住ナシは半閉鎖的な環境にあつて孤立的であり、その結果、移住当時の習俗がかなり維持されているともいわれる。

## 2. 俄亜ナシの年中行事と神々

俄亜ナシは、宋報告によれば1年間につきのような行事を行う。

1月は新年で、1日と15日に山の神を祀る。ともにシゾジ山において前者はムラ全体で、後者は戸別に行う。3日から15日までは「祭天」を行う。2月は8日に「牲口節」があり、家畜の繁盛を家畜神と山神に願う。同様の祭りは12月13日にもある。3月は13日に大規模な祭山を村全体で行う。3日には村全体で水神を祀って邪穢を祓う。6月1日と11月1日は、前者は戸別に秋作物の収穫を、後者はムラ全体で春作物の収穫を祖先に感謝する。12月27～29日には13歳になった男女の成年式を行う。

彼らの歳時は、時のサイクルの作り方や内容が太陽や月、星の運行に沿って行われていると推測される。例えば歳時の日にちは1と15日前後に集中しており、毎月が月の動きで刻まれていることをうかがわせる。また生業に関わる歳時は2と12月、6と11月と対で行われ、後半の11、12月を盛んに行うことから、冬至を中心とした太陽の動きも生産と深く関わっている。

内容は、集団の維持と存続を目的として以下の3種を行う。第1は、構成員の繁栄を願う子授けや児童のための儀式、成年式など。第2は、生産活動に関する農業と牧畜の儀礼。第3は病や災をもたらす邪悪な「鬼」を駆除する定期、不定期の儀礼で、毎年3月の山神や水神の祭りなどがある。

時間のサイクルについては、特に生業に関する祭祀を開始と終了時の2回同様に行う。生業は農業と牧畜を主とするが、このうち6、11月の祭祖が農業に関わるもので、前者は米の予祝、後者は小麦と大豆の収穫感謝の意味をもつ。牧畜に関わるのは2、12月の「牲口節」で、山間での放牧の開始と終了、すなわち開山と封山に合わせたものとみられる。

崇拜対象の神々は、天神、山神、火神、水神、祖先である。最高位は天神で、山神は天神に次ぐとされる〔宋、2003:122〕。ただし山神は天神よりも頻繁に登場する。神々の性格は、後述のように、山神は明らかに山という自然に対する崇拜に発するのに対して、天神は自然を支配するというよりは、むしろ人間界、特に妻方の一族を表すものとして語られている。天神は、彼らの最も重要な祖先であり、恵みをもたらす神である。天神を語る伝説は、ナシに伝えられた彼らの移動と定住の歴史でもある。また祭天では、儀礼食物は彼らが本来主食としていたオオムギ類ではなく、定住後に獲得した大米であり、大米を生産できない俄亜でもそれを行う。これは、

牧畜民であった彼らが定住後にどのように農耕を知ったか、農作物をもたらしたのは誰であるかという祖先の記憶を儀礼に反映したものであろう。

祭祖（ツベ）では、楊樹あるいは青崗樹で口や目をつけた像を作り、麻布で包んで祖先がやってきた方角の山洞に置く。俄亜ナシは、指路経によれば中国西北部から木里、永寧、素羅、俄又、洛吉、白地、大覇、黑白水、白沙、麗江を経て来たとする。祭祖は年に2回、6月と11月である。前者は戸別の小規模なものである。1日目は、男性が2本の青崗樹を伐って来て、祖先像として家内の祖先棚に置く。あるいは箕の中に鵝卵石を置く。酒1樽と収穫したばかりの小麦を煮たものを供える。2日目は、ブタ1頭を殺して果物を供え、トンバが経文を読んで祖先の帰宅を願う。11月1日は春作物収穫後の秋の大祭である。祭天場の祖先棚に青崗樹数本を挿し、ブタを殺して肉や食糧、果物、酒、米花糖を供え、トンバがチビ経を読んで歴代の男女祖先の帰宅を願う。このように祖先は、農事祭祀の中心であり、定住について重要な要素であった農業に深く関わっている。

祖先は、中央室内の大小のベットの間に設けられた棚に像あるいは1～数本の矢を挿した瓶、羽を付けた鉄矢を取めた竹筒を置き、それには五色旗と銅鏡一枚をくくりつける。矢は驅邪を可能にし、祖先を守るとする。さらに祖先祭祀では、女性祖先崇拜が顕著である。彼らは東南西北の四方にホプラム、アハラム、ハシラム、チルラムの4女神を想定する。また女陰崇拜の痕跡もみられる。木里瓦廠白河郷沙窪村（石崖の2つの洞孔）、前所の打兎窩、永寧の乾木山が子授けに効能があるとされる。これに対して男性祖先は、女性祖先に後発するもので、決まった神像もない。

水神は3月3日に全村で龍打河と東義河が交わる処の吊り橋付近において祀る。大トンバを中甸北地から招き、村人は鶏、猪膘、米、酒、茶、香を河辺で女神に奉げる。まずトンバが順調な風雨と人畜の安全を祈って経文を読み、鶏を殺し、猪膘を煮て酥油茶を祖先に捧げる。村人は先を争って吊り橋付近の河で沐浴し、新しい麻服に着替え、古着を河に棄てて流す。穢れを祓う意味をもつ。

火神チョンジワンズは、モソのジャンバラに相当する。イロリの傍らに立つ高さ30cm、直径20cmの石柱（或いは陶製）で象徴される。食前には必ずイロリの五徳の3本脚にまず食物を供え、その後家族が食する。石

柱型の火神は、麗江ナシや中甸ナシにはなく、ナリヤロコ湖以東のプミ族にみられる。チャン系集団の多くは、イロリの五徳の3本脚を火神や男女の祖先を表わすとするが、石柱の神で火神を象徴したものはない。ナリ特有のものをナリに囲まれたナシが導入したのだろう。

このほか白石（ラボ）に対する崇拝も大きな特徴の一つである。ラボは山頂、家屋の屋上や四隅、祖先を祀った棚などに置かれ、祭祀時には必ず小さなラボと数本の小枝を使う。家の入口の両側にも2個のラボを置く。これは、兄妹が結婚したためにその罰として門を守るようになったと伝えられる〔宋 2003:124〕。三江口の傍にあるラサルミは、バムト女神がチベットから雲南の鶏足山に行く途中、日時を違えたために3日間ここに滞在し、その時に乗っていた馬とされる。周辺の民族もみな崇拝しており、結婚後妊娠できない女性はここに来て子授けを願う。香をたいて仰頭し、鶏を殺して捧げる。祀り終了後、瓢箪に金沙江の水を汲み、自分で飲む以外に持ち帰って沸かし、まず祖先にあげ、次に夫婦で飲む。ラボは神の依代である。

### 3. 達住ナシの年中行事と神々

達住ナシは、明代に麗江ナシの木土司が木里を占領した際に派遣された兵士たちの末裔である。兵士達は木土司の勢力衰退とともに戦いに破れ、そのまま現地に残留した。彼らはまず寧蒭八耳に行ったが、祭天用の黄栗樹がなかったためにさらに塩源達住に移住した。そして敵対していた永寧土司の支配から逃れるために敢えて木里寺大ラマに献納してその管轄下に入った〔四川省編輯組、1987:24〕。

達住ナシの年中行事は、俄垂ナシと多くの類似点をもつとともに隣接するモソヤチベット族、漢族の影響もみられ、つぎのように行われる〔四川省編輯組、1987:24～27〕。

1月を新年とする。1日は戸別に活動する。夜明け前に牛角あるいは海螺を吹き、松の葉を燃やして神をまつり、河辺で年初の水を汲む。夜明けとともにグム山上の経堂で香を燃やして山神を拝む。帰宅後、トンバあるいは家長が経文を読み、石を焼いて穢れを除き、イロリの前の火神ジャンバラを祀り、祖先を祀る。朝食後、一族の年長者から順に新年の挨拶にま



わる。2日には一族間で互いに招きあう。

3～9日までには「祭天」を行う。準備は12月13日から始まる。

2月は、8日に「牲口節（ホンソン）」を行う。早朝、子供達が煮た豚足や粍粍をもって家畜を追って山上にいき、松の葉を燃やして供物を供え家畜繁盛を祈る。夜には家で再び山神と祖先を祀る。7月24日にも同様の祭を行う。さらに2月には日を選んで水神を祀る。木板にトンバが画いた「グプスハイ（龍王）」「ラオ（鳥頭魚尾の大鳥）」「狗（西）」「鹿（北）」「馬（東）」「牛（南）」「山羊（中）」と祭天の供物を持って水源に行き、順調な風雨を水神に祈る。最初に定住した一族であるスル家は一族で会食。

3月は、中旬の一日を選んで戸別に祖先を祀る（ロンガハヨ）。酒・茶・肉飯を供えて香りと灯を点し、トンバが経文を読む。最後に供物を外に投げて鳥に喰らわせる。4月は穀物の豊作を祈って谷神を祀る。6月は、1日に大麦やエンドウの収穫期に新穀を供え、共食して祖先を祀り収穫感謝を祝う（タブ）。スル家の古い家々が黄栗樹を家内に植え、20～30斤のコブタあるいは鶏一羽を殺して祀る。スル家以外の人々を食事に招く。11月にも日を選んで同様に祖先を祀る。ブタを殺し、トンバが経文を読む。

7月は、29日に全村で山羊を殺して鬼を駆逐する。トンバが各戸を回って驅鬼経を読み、子供たちが木刀をもってトンバの後に続く。10月は、日を選んで風神を祀る（ハントブ）。各戸は松明をつけ、雄鶏と雌鳥1羽ずつをもって各戸の決まった樹木に行く。トンバが風神経をよむ。5月5日に雄黄酒を飲み、8月15日に中秋節を行う。

以上のように達住ナシの歳時は、俄亜ナシと同様に祭天を最も盛んに行い、3,4,11月には農作物の豊作祈願や収穫感謝を目的に祭祖を行い、2,7月に放牧に関する「牲口節」を行う。またトンバを中心とした村全体の驅鬼行事や祭風、祭水があることは、俄亜でも不定期的ではあるが行われている。しかし山神祭りを俄亜のように村全体で大規模に行うことはない。また1月7日のラマによる驅除儀礼にみられるようにチベット仏教の影響をより深くうけいれており、一方で5月5日の端午節や8月15日の中秋節のような漢族の儀礼もみられる。

四川ナシの年中行事は、俄亜ナシのそれが原型に近いのではないかと思われる。年初の祭天を最大の行事とし、農業と牧畜の始まりと終わりに生

業形態に関わる儀礼を行う。農業には祖先を祀る祭祖を6、11月の年2回、牧畜には山神を祀る祭山を2、7月に行う。山神祭りは、3月に大々的に行う俄重に対して、達住では山神はたびたび登場するもののムラ全体で単独に大々的に行われることはない。隣接するナリが7月24日に女神グム山の祭りをを行うことから、7月24日のホンソン（牲口節）がそれに相当するのかもしれない。

#### 4. 塩源ナリ、永寧ナリの年中行事との比較

塩源ナリの年中行事は以下のようである〔四川編輯組、1987:190～192, 233～247〕。

新年の準備として9、10月にブタを殺して猪膘を作る。12月に米を購入し、糶粍、醸造酒、豆腐や瓜籽や米花などを準備する。大晦日には家屋の内外を清掃し、庭に2本の松をたて、門に対聯や彩紙（日、月、星、鴨、羊を描いたものもある）を貼る<sup>(4)</sup>。

新年クシは大晦日から始まる。ラマとダバ（シャーマン）を招いて祖先を家に迎える。まず祖先に料理を供え、つぎに家人が食べる。この日、家族構成員は必ず家に戻る。また他家を訪ねない。ジャンバラの降臨を願って水を供える。1日夜が明けたら、成年式（かつて土司の子は9歳、一般家庭は13歳）を行う。ラマとダバが占った時間に下座のイロリの2本の柱前で、永寧地区では男性は男柱、女性は女柱の前で（左所ではどの柱の前

(4) 新年の準備では、米を生産していないムラは他村に交換に行く。猪膘は大晦日にこれを2等分して半分を新年用に、半分を切り分けて保存し、後半の食料や贈答などにする。対聯を貼ってからの新年の間借金取立てをしてはならない、不吉であるからだという〔四川編輯組、1987:192〕。

(5) 大晦日には、欠けた家族の分も食器をならべて料理を分け入れ、一家団円の形にする。また家族がそろっていないと食事をしないという場合もまれにある。食事は満腹をよしとする。新年を迎える大晦日の夜には、家に神が降臨して各人の重さを測るので体重が重ければ重いほどよいとされるからである。また夜には、庭に敷いた松毛を燃やし、次の日に燃え尽きたら吉とする。永寧では、この夜、新年に成年式（女性は穿裙子、男性は穿裤子）を挙げる。13歳たちが男女別に分かれ、朝まで食べながら「山歌」を歌う。ナリは1日から10日までに動植物をあてる。順に鶏、狗、猪、羊、牛、馬、人、谷（穀物）、豆、綿花で、その日にその動植物を食べてはならず、当日日和がよければ該当のものが豊作になるとする〔四川編輯組、1987:192～193〕。漢族にも同様の数え方があり、その影響がみられる。漢族は1～7日まで鶏、狗、猪、牛の五牲と馬を配し、最後を人とする〔中村喬（1990）『続中国の年中行事』平凡社61～64〕。

でも可), 脚で猪膘と食糧袋をふみ, 門枠に数回打ち付けたスカートを頭から(ズボン足から)着る。祖先, 火神, 老人を拝する。1日は, 村内の一族の老人や遠方の客を招く。3日まで, 昼間は歌を歌い, ブランコにのり, 夜は跳鍋庄をする。15日は, 新年用の松を抜いて門の彩紙をはずし, 夜にご馳走を食べて新年を終える。次の日から仕事を始める<sup>(5)</sup>。

3月ブグラクには種まきを開始する。龍王の降臨によって雨がふるので夜明けには皆が競って河辺に水を飲みに行き, 龍王に遇えたら一年間平安無事に過ごせるといふ。庭の外に草木の灰を撒いて蛇が内にはいるのを防ぐ。部屋の入口に柳の枝を掛け, 頭には柳枝で編んだ丸い帽子をかぶる。5月5日アリモには鍋庄を祀り, 酒を家屋の屋根に撒き, 菖蒲と艾蒿を掛け, 雄黄酒を飲んで邪悪なものや病を防ぐ。

7月25日は女神グムの山(獅子山)を祀る祭山を行う。女神グムは神山の主であり, 最も子授けに効果があると信じられている。主に青年男女が食物をもって山に上り, 香をたく。男女は踊りながらアチュ(恋人)をみつける。8月15日は祭祖で, ダバを招き, ブタを犠牲にして亡くなった祖先を祀る。永寧は10月, 左所は8月15日, 前所は15日にはモンゴル人を殺したので祖先を祀ることはできないとして2日にする。11月12日はルタ(牛馬年, 過小年)で, 子供達の無事な成長を祈る。

永寧ナリの年中行事は, 塩源ナリとほぼ同じである。女神グムを祀り, 人畜繁盛と五穀豊穰を願い, 子供の誕生, 無事な成長を祈る7月25日の祭山を最大の祭りとする。また新年は, 12月20日に火神ジャンバラを祀り, 成年式を行い, 一家が団円する。生業に関わる10月バコジブ(祭祖), 11月12日インジャ(牛馬年)もある。祖先, 火神, 水神も崇拜し, 内容的には3種あり, 農業や牧畜など生業と関わるもの, 駆邪, 人口の繁栄を願って子授けや子供の順調な生育を願う〔雲南編輯組, 1987:75〕。

### 第3章 四川ナシの祭山と祭天

#### 1. 四川ナシの祭山

四川ナシの居住地は, 3000メートル級の山々に囲まれた土地にあり, 山は自然を代表し, ナシにとっては最大の原初的な神である。祭山の目的は,

人畜の安全と五穀豊穰、順調な春耕、子授け祈願である。俄亜村の南には男山、北には女山（ザクザアジュ）があり、女山の清泉で沐浴すると妊娠するという。俄亜ナシの祭山は次のようである〔宋、2003：122～123、四川省編輯組、1987：118～119〕

毎年3月13日、村全体で、各戸から一人が参加（男女どちらでも可）して村の北の山腹にある祭壇場で行う。各人は粳粳1個と白酒1碗をもっていく。祭壇の前に5本の桃枝を挿し、周囲に彩色の旗をはりめぐらす。トンバがジビ経を読む。読みおわるとこの日のために養った牛を煮て皆で共食する。終了後、牛肉がそれぞれに配分され、家で家人と食べる。各戸が食事に招きあう。

新年の1、15日は、トンバが80あまりの山名をよびだす。うち最も崇拝される5山は、山頂に湖があって海螺を産するシリジ、砂金をだすザビヤジ、鉄を産するシャラトジ、蘇達河北側の男山ラグスツジと南側の女山ザクザジである。男山には岩があり、男の子を多く授け、女山には清水があつて女の子を多く授けるという。1日には、新しい服で着飾った男女が猪膘肉や酥油、酒茶、米、香などを持って山上に上り、集団で山神を祀る。トンバが山名をよび、来臨して供物をうけるようにという経文を読んでもらう。祭祀後、その場で野宴をし、老人から順に敬酒をする。参加できない者は、事前に10斤の食糧をだし、責任者がそれで酒を作ってみなふるまう。15日は戸別に家長が主催者となって山上で香をたいて叩頭し、供物を捧げる〔四川省編輯組、1987：118〕。

新年1日と3月13日の祭山は、場所は前者が山上、後者が山腹の祭壇場であるが、ともに村全体で同様の形態で行う。また供犠が他の祭祀と異なつて牛であることも、祭天がブタであることと異なっている。

四川ナリも、山神を重要な神と位置づける。天神という存在は設けられているものの特別な祭天を行わない。山神は、農作物の豊作や家畜の繁盛を掌るだけでなく、人の繁栄や美醜を決めるとする。また各地には独自の神山があり、それぞれが幾つかの小さい山々を管理する。儀式には、ダバが主催して正月5日か7月15日に村全体で行うものと、家長或いは老人が毎日朝晩、自宅のスタで行う各戸単位のものがある。

儀式の内容は、村単位のもの、当日全村人が村の神山に集まる。犠牲

にした山羊と鶏、数百の「神鬼人形」を供え、松の葉を燃やす。ダバが「ワグラ」経（山神に全村の人畜繁栄と豊作、順調な風雨、水草繁茂を祈る）をよみ、ピジャとハスがボを振って鼓をならし、呪語を唱える。最後にダバが神樹に麻糸に彩色の布（山神への供物を代表）をさげてかける。同時に、病人は自分の服や装飾品などを神樹に掛け、ダバに「求寿経」「消災経」をよんでもらい数羽の鶏を放す。

家庭での祭山も同様である。屋上のスタで松の葉を燃やし、清水とザンバ粉を撒き、土地の大山神、村の神山、一族の神山、自家の神樹の名を順に呼んで山神に一家の繁栄や無病息災、吉祥平安を祈る。各戸の神樹、山神の依代である。

以上によれば、山上での儀式の内容および形態は、チャン族やプミ族、川西南チベット族の山上でのそれに極めて似ている。また毎日朝晩、屋上のスタで行う祭山は、まさに川西南チベット族に広くみられる習慣であり、ナリの祭山が、チャン系集団の系統であることを示唆している。

またナリは、各地で固有の山神を女神として崇め、子授けを祈る〔和志武等、1993：114～115、四川省編輯組、1987：234～235〕。永寧では、獅子山は女神グムの山で、永寧の人畜繁栄や豊作を掌る神であるとともに山神の主であるという。永寧人は、7月25日に数戸あるいは数十戸が麓で松の葉を燃やし、蜂蜜やザンバ、生花、牛乳、茶等を供え、叩頭して祈る。アチュ（恋人）とともに山の周囲を一泊しながら回る若者もいる。伝説では、グムの最初のアチュは前所のワルブラであったが、二番目のアチュの忠実村のズジに嫉妬してその生殖器を断ち切った、それがダバ村にある長方形型の山堡だという。木里では、女神パドンハマがおり、海からウズニク洞窟に来たという。洞窟内には清水が湧き、女性の生殖器を象る石がある。永寧のチベット佛教の高僧たちは毎年11月中旬に7晩、そこで経を読む。永寧ではグムグ山参拜でも妊娠しなかったらこのパドンマ廟に行き、廟前の柏樹に銭をかけて妊娠を願う。

また男神（男神の山）にも子授けや子供の順調な成育を願う。伝説では、これらの男神たちは、女神グムグのアチュだとされている。忠実村では、ズジ山（グムグの2番目のアチュである男神の山）を子供の成長をみまもり、当地の保護神であるとして毎月1、15日に香をたき、叩頭して祈る。

開坪郷では、アサ山の山頂にラマ廟があり、ラマを管理する山神であるとす。毎年正月1, 2日に永寧の活仏とラマが行って経文を読む。一般人は5, 15, 25日に参拝する。女性は麻糸を廟の周囲にまいて菩薩の加護を願う。またワハ山は最大の男神であるが、女神グムグの管轄下にある。毎年7月15日に永寧盆地のナリの男女がグムグに参拝するのと同様に(規模は小さいが) 祀る。

ナリは、山々の序列において女神の女山を頂点として男神の男山を配する。ナリの社会では、天界では女性を太陽、男性を月とするが、ナシでは逆に、太陽は男性で、星群が彼らの子供たちであるとする。自然界の序列にも、ナリは母系制、ナシは父系制を反映させている。

俄重ナシの祭山、祭天は、チャン系集団のそれと比較すると次のような特徴がある。

1. 四川ナシでは、山神は天神につぐもので、祭山も祭天の次に位置づけられる。しかしチャン族やブミ族、川西南チベット族には天神という存在は想定されておらず、祭山が最大の祭りである。
2. 祭天は、ナリにはなくナシのみにみられる。ナリにはムグラという天神がいるが、ナシのような祭天の儀礼はない。しかしチャン族の南部方言地区には天神が最高の神としてあり、ナシとほぼ同様の伝説「ムジジョ」を伝えている。ムジジョはチャン族の女始祖である。両集団ともに、ある地域に定住した時に生業の中心が牧畜から農耕へと移り、農耕技術を女性との婚姻を契機に男性が女性の父からだされた難題を一つずつ解決していくことで学んでいく。ナシの場合は、米の水田耕作技術とブタの飼育を知る。そこには妻方の社会が天神および天界の存在として登場する。
3. 白石崇拜もチャン族やギャロン・チベット族などに広くみられ、チャン系集団の特徴の一つとして指摘されている。管見の限り、麗江ナシではほとんどきかないが、四川ナシにおいては特定の神を象徴するものではなく、いわゆる霊的な存在全体の依代として登場する。

## 2. 四川ナシの祭天

祭天の儀礼は、四川ナリにはなく、四川ナシのみにみられる。「祭天・崇邦颯」によれば、ナシの始祖夫婦が3年たっても子供にめぐまれず、妻方

の父母と叔父に感謝する儀礼を行ったら3人の子に恵まれ、後にチベット族とナシ族、ペー族になったと伝える。

俄亜ナシの祭天（モブ）には、特徴としてまず以下の点があげられる〔和志武等、1993：54～56〕。

第1に、固定された祭祀グループがある。祭天グループは、木官家（かつての支配者一族）を含むプト一族とトンバ家を含むグス一族に大別される。プトはグスより上位に位置付けられている。そのため祭祀の内容はほぼ同じだが、小祭、大祭、清竈の期日が、プトは必ずグスの前で4～8日に行うのに対し、グスは9～14日である。最終日の供物も、前者はブタ、後者はニワトリである。政治的支配者を宗教担当者の上に位置づけたことは、この祭祀が後発の、政治的な性格をもつことを示している。

また祭祀の主催集団として固定された組織がある。大トンバ、カシ（トンバ）とカバ（トンバの手伝い）、木官（かつての支配者一族）、祭祀の豚を飼育する2戸、酒造りの2戸である。各戸はブタの飼料と米酒用の米をだす。

第2に、その土地では栽培されない米が儀礼食物とされ、ブタを犠牲にする。「祭天・崇邦颯」によれば、祭天の犠牲は、元来大きな黒色の黄牛と白角の黄牛であったのが、農業社会になってから黒白のブタになったとする〔和志武等、1993:42〕。

第3に、伝説では、天神は妻方の父を表す。それは農耕を生業とした社会への移行を反映している。俄亜では祭壇に3本の樹木を立てる。中央が柏で人皇、左右が青崗樹か黄栗樹で、左は天神、右は地神を表す。天神の後方の松は戦神を表す。天神はソラアブ、妻はズボンアソダといい、ナシ族の男性始祖レンリエンの妻ツホブバミンの父母である。麗江地区ではこれに柏で表された舅舅（妻の兄弟）が加わる。

「創世記」に記されたナシ族の起源によれば、大洪水によって1人生き残ったリエンは、天女チェンホンバオパイと愛し合い、天帝ズロアブから出された難題、刀の梯子を登る、一日で99山の樹木を切って焼き、一日で99山の畑に種まきをおえ、一日で99山の種子を拾い集め、キジバトやアリに食べられた種子を捜しだす、岩羊を捕らえ、魚をとり、虎の乳を搾るなどの問題を天女の助けを得て解決し、ついに結婚した。途中の困難を

乗り越えてついにボンシタオベンタン（現在の麗江地区白沙）に定住した。しかし3人の息子はみな口がきけなかった。そこでコウモリを天界に派遣して天帝から祭天の秘法をききだし、人間界でそれを行うと、息子たちは話せるようになった〔和鐘華ら、1992:130～131〕。

チャン族の始祖伝説「ムジジョ」によれば、天女ムジジョを愛したトアンジュは、天帝アバムピタから出された難題、氷溝に立って落下してきた木石を受け止める、9の荒地の灌木を切って焼く、そこに種を撒く、そこから菜種を拾い集める、種を食らう鳥鳩を射殺すなどの問題をムジジョの助けを借りて解決し、結婚する〔四川省編輯組、1986:161～166〕。

両伝説とも、難題は焼畑耕作法のプロセスであり、農耕社会への移行を示唆するものといえる。

第4に、神を祀る時に女性の参加を認めない。祭山が全住民参加であるのと大きく異なる。ナシの父系制が中国王朝あるいは漢族との接触以降に確立したとする通説に従えば、明代初期に麗江から移住した俄亜ナシに父系制普及以前と以後の形態が残存していることは、上記の通説の時期を想定させるものである。

以下はプト一族の祭祀活動の内容である〔和志武等、1993:55～59〕。

準備は12月1日から始まる。神酒造り担当の2戸が山に松の柴を切り出しに行く。9日は祭天場の清掃、10日は柴を祭天場に運ぶ。13日は神ブタ飼育担当の2戸が山から柏樹1本（人皇）と青崗樹2本（天神と地神）を切り出す。14日、酒造り2戸が神米酒（糯米で造った甘酒）を仕込む。30日は全住民がソダ河で身体や衣服を洗って1年間の穢れを祓う。山から切り出した竹と香料葉で大小の神香を作る。2日、各戸が順に木官を招き、飲食。神米を入れるトンジャンを準備。3日は、午前が神米洗いの儀式、午後は神米量りの儀式を行う。午前にトンジャンを河で洗い、真っ赤に焼いた石を置いて清める。午後、米搗き場に12個の石、12本の香、鶏1羽を置き、トンバが念経、カシが神米を搗くまねをし、カバが杵で搗いた神米を量ってトンジャンにいれ、松毛で蓋をする。また主人は大麦の穂を神台や柱、水甕など屋内の各処に挿す。

4日はトデウ（小祭）。夜明けとともに木官、トンバ、トンジャンを背負った各戸の男性が祭天場に行く。祭天壇は第一壇が神樹（神酒甕）、第2



檀が供物（神ブタ、神米、酒肉飯をいれた9碗）、第3壇に木官らが並ぶ。木官らは13本の香をもち、神樹の前で礼、香をたてて叩頭し、五穀豊穡や六畜繁盛などを祈る。神酒甕を祭天場の中央に出し、トンパ、木官、カシ、カバ、長幼の順に天神、地神、人皇に捧げる。神への敬酒が終わったら、女性も参加。午後は、射的競技。夜は参加者が祭天場で野宿。

5日はベンデウ（大祭）。夜明け前に神ブタ飼育家がクロの儀式を行う。トンパらを酒食に招き、ヤギを殺して菩薩を祀る。一族の全男性が神ブタを祭天場に運ぶ。神樹の前に焚き火を3つ作り、石3個を焼く。天樹の下にブタを置く。トンパが「チョンボツチュ」経（人類起源と創世記、麗江からの移住の歴史）を読む。トンパと人々が声をかけあって天神、地神、人皇に対して神ブタの享受と降福を願う「イラマイ」を行う。ブタを殺して解体し、肉を各戸に分配する。帰宅。午後は再び祭天場で儀式。男性成員が祭天場に集合、解体したブタの頭部を天神に、他の部位も肉や内臓は煮込み、焚き火や焼けた石で焼き、トンパが経文を読んで神々の享受を願う。供物をトンパはじめ皆で分けて持ち帰り、家族で共食。

8日、ガルス（清竈）。早朝、山から樹木3本を再び切り出し、天壇にさす。コブタと神酒を供える。トンパらが香をたき、叩頭。ブタを解体し、神々に捧げた後、各戸に分ける。神樹の葉も各戸に分ける。

俄亜ナシの祭天は上記の過程をもち、達住ナシの祭天も漢族チベット仏教の影響を受けながらも<sup>(7)</sup>基本的には同様である。また、これは和志武ら編の報告に記された麗江地区や中甸三壩地区の祭天と基本的に同様であり〔和志武等、1993：40～58〕、むしろより複雑で古来の形に近いのではな

(6) トンパ教がボン教から受容したものととして、①松枝を燃やし煙をあげて神と交感すること、②靈魂をあの世に導くための綿羊を犠牲獣とすること、（楊福泉「東巴教と本教之初歩比較研究」『藏彝走廊：歴史与文化』四川人民出版社2005：171～172）があげられているが、これはチャン系集団の折り方とよく似ている。

(7) 達住ナシは、祭天の間、3日は供物を携え、馬に乗って墓地に行き、祖先を祀る。4日は、祭天場で射箭を競う。まず四方を射、つぎにトンパが木板に描いた鹿の的を射る。四方を射るのは、かつて四方に戦争に行った時の必勝祈願だという。5日の夜は、祭天場で馬子と仲買人に扮した村人が木製の馬で値段交渉を演じ、商売繁盛を祈る。6日は、男性達が貴族・官吏、女性に扮し、笛の伴奏をつけてジャツォを舞う。女性は参加できない。7日は、法具を持ったラマとジャタ（酥油茶を作る道具）を持ったチベット服を着た役者が水をまき、銅号を吹く。一吹きを合図に若者達が娘達をラマの前に引き連れて跪かせると、役者が娘の頭に水を垂らして穢れや災い、邪悪なものを払う。

いかと思われる。

## おわりに

本稿は、漢・チベット語族チベット・ビルマ語群のチャン語系とイ語系に属する民族集団における祭山（山の神祭り）研究の一環である。同集団は、祖先が中国西北周縁部から南下してきたという伝承をもち、古代遊牧民「羌」の末裔とされる人々である。筆者はこれをチャン系集団と呼び、祭山の儀礼および白石崇拜をその共通した基層文化の重要な要素の一つであると推測し、チャン族やプミ族、川西南チベット諸集団においてその類似性と連続性を指摘してきた。

ナシ族は、チャン系集団の西端に位置してチベット族と接し、チベット仏教の影響を受ける一方で、政治や文化的には明代以来、積極的に漢族と接し、様々なものを導入してきた。その結果、定着の時代や周辺民族との文化接触の違いによってナシとナリという異なる社会体制や文化形態をもつ集団に分かれた。これは、民族の文化変容を考える上で貴重な事例である。特に本稿でとりあげた俄亜郷のナシは、明代中期にこの土地に移住して以来、閉鎖的な地理条件の中で徹底した内部での「婚姻」を進めた結果、「活化石」と称されるほど古来の習俗が根強く伝えられているとされる。

俄亜ナシの祭天と祭山についても、麗江ナシや永寧ナリ、およびチャン系集団のそれとの比較を通して、以下の点において古来の形態を残すものであろうと推測される。

第1に、俄亜ナシの祭山はチャン系集団のそれと同型であり、白石崇拜も顕著である。ナシの古来の祭山の形態を示唆している。

第2に、祭天はナリにはなく、ナシにみられる儀礼である。また天神に代表される天界は自然界の人格化というよりも、むしろ異なる集団を映したものと考えられ、米を儀礼作物とすることや祭祀の内容から、牧畜の生活をおくっていたナシの祖先が農耕社会を形成していた土着民と接触し、特に焼畑耕作やブタの飼育、米作などの技術を修得していった歴史を反映していると考えられる。これは、チャン族が牧畜から農耕へと移行した歴史を語る女性祖先ムジジョの伝説とほとんど同じである。

第3に、俄亜ナシには、山に象徴される女神信仰がナリと同様にみられる一方で、女性を参加させない祭天が最も重要な祭祀として位置づけられている。この地の習俗が明代中期のそれを色濃く残すものであるとすれば、社会における男女の位置づけがこの頃から大きく変化していったことをうかがわせる。

以上、本稿では、祭天と祭山という儀礼を既存の報告資料から分析し、ナシ族の明代以来の文化の動態とその背景、およびチャン系集団との文化的関連を考察した。しかしこれはあくまでも既存の報告を基にしたもので筆者自身の第一次資料ではないために様々な疑問も残った。次稿「四川ナシの祭天と祭山（2）」では、（1）の推論を筆者の2007年の実地調査による一次資料によって訂正補充し、さらに検討したい。

〔引用文献〕

- 雲南省編輯組（1987）『寧蒗彝族自治州納西族社会及家庭形態調査』雲南人民出版社
- 雲南省編輯組（1988）『寧蒗彝族自治州永寧納西族社会及其母系制調査』雲南人民出版社
- 嚴汝烂・宋兆麟・劉堯漢（1987）「四川省塩源木里兩県納日人社会調査」『四川省納西族社会歴史調査』四川省社会科学院出版社 133～322頁
- 四川省編輯組（1986）『羌族社会歴史調査』四川省社会科学出版社
- 石碩主編（2005）『藏彝走廊－歴史与文化』四川人民出版社
- 宋兆麟（2003）『俄亜大村－一块巨大的社会活化石』四川人民出版社
- 田雪原主編（2005）「納西族人口」『中国民族人口』中国人口出版社 557～628頁
- 松岡正子（2000）『四川省のチャン族とチベット族』ゆまに書房
- 松岡正子（2003）「西番におけるプミ語集団－四川桃巴プミ・チベット族と雲南箐花プミ族を事例として」『民族の移動と文化の動態－中国周縁地域の歴史と現在』風響社 419～475頁
- 木里藏族自治州志編纂委員会（1995）『木里藏族自治州志』四川人民出版社
- 李近春（1987）「四川省塩源县沿海公社達住村納西族社会歴史調査」『四川

- 省納西族社会歷史調查』四川省社会科学院出版社 1～69 頁
- 李紹明（2006）「川滇邊境納日人的族別問題」『摩梭社会文化研究論文集』雲南大学出版社  
105～115 頁
- 劉龍初（1987）「四川省木里藏族自治州俄亞鄉納西族社会歷史調查」『四川省納西族社会歷史調查』四川省者社会科学院出版社 70～132 頁
- 和志武・錢安靖・蔡家麒主編（1993）『中国原始宗教納西族卷』上海人民出版社 1～432 頁